

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

戦中・戦後における神戸華僑の体験：華僑学校の教職員の事例

著者	曾 士才
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化．論文編
巻	19
ページ	53-84
発行年	2018-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/13831

〔論文〕

戦中・戦後における神戸華僑の体験

—華僑学校の教職員の事例—

Experiences of Overseas Chinese in Kobe during and after W.W. II

—Case of teachers and staffs in Chinese School—

曾 士才

SO Shisai

目次

はじめに

- 1 華僑学校の略史
- 2 教員・王曰英の来日の経緯
- 3 職員・曾廣仁の終戦直後までの経歴
- 4 戦中・戦後の教職員の体験
 - 4.1 監視下の生活
 - 4.2 校舎の焼失と避難生活
 - 4.3 大開小学校での間借り生活
 - 4.4 集団結婚典礼

おわりに

注

参考文献

はじめに

1931年、関東軍の謀略による柳条湖事件に始まった日中戦争は、37年、盧溝橋事件を契機に全面化し、45年、日本の降伏によって終結した。この十五年戦争の時期は、日本の国民だけでなく、在日華僑にとっても生活の窮迫、勤労働員、空襲による死傷、家屋の焼失・損壊など苦難の日々だった。しかし、祖国と居住国とが戦っていたことは日本華僑独自の戦争体験だったといえる。

日中戦争が勃発すると、在日華僑は大量に帰国した。在日中国人人口は、1930年に3万836人だったが、37年末には1万5,526人にまで減少した。神戸在住中国人について見ると、盧溝橋事件前の37年7月には6,146人いたが、半年後の38年1月には2,628人になっている。2,628人中、一番多く占めているのが「無職並びに家族」で、986人(37.5%)いた。つまり、たとえ日中両国が戦争状態になっても、生活の基盤を神戸に置き、家族とともに暮らして行かざるを得ない人たちがいたことがわかる(中華会館2013:194)。

一方、帝国の植民地となった台湾や勢力圏である満洲国、北京、南京にできた傀儡政権の支配地域から一定数の中国人が新たに来日している。それは主に日本各地の大学に進学した留学生であった。また、華北地方などから強制連行され、日本全国135か所の事業所(炭鉱や港湾建設・ダム建設現場など)で労働に従事させられた人たちでもあった。筆者はかつて札幌に焦点を当てて、戦時中に北海道大学に留学していた人たちや日本に残留した強制連行者によって戦後の札幌華僑社会が築かれていった様子をまとめたことがある(曾2014、曾2016)。本論文でも同様に、戦後の華僑社会の形成過程に関心を持ちつつ、定住中国人の割合が一番高い神戸に焦点を当て、華僑の戦争体験を論じたい。神戸の華僑社会では、戦前、戦後を通じて華僑学校が大きな存在であり、コミュニティの文化的、精神的支柱になっていた。しかし、1984年に刊行された神戸中華同文学校(以下、中華同文と略す)の

八十年史『学校法人神戸中華同文学校八十周年記念刊』を見ても、1939年に神戸華僑同文学校と神阪中華公学が合併し、中華同文が設立された頃から、戦況が悪化するなか、華僑学校が最も苦しい時期を支えた理事や教職員が誰だったのか判然としない。恐らく戦争末期の空襲によって華僑学校が焼失してしまったため、学校側に関係する記録や資料がなかったからかもしれない。その意味では、当時を知る関係者への聞き取りは有効な手立てだと考えている。

そこで、本論文ではその試みの一つとして、戦時中から中華同文の教員であった王曰英（おう・えつえい）の残した当時のアルバムを手がかりに、王曰英ならびに同時期に職員として（戦後に教員となる）中華同文に関わった曾廣仁（そう・こうじん）、中華同文が空襲で焼失し、日本の小学校に間借りして再開にこぎつけた影の功労者であり、後に妻とともに同文学校の教員となったこともある詹永年（せん・えいねん）の3名への聞き取りを行った。彼ら3名の戦争体験を通して、日中両国のはざまで戦時下を生き、そして廢墟のなかを生き抜いた神戸華僑の姿を垣間見たい。

王曰英（1922年生—2008年没）は中華同文の教員となるため、1943年に日本にわたってきた小学校の教員で、1967年4月に放送が始まった「テレビ中国語講座」の初代指導アシスタントを務めたことがある。曾廣仁（1917年生—2003年没）は神戸生まれ、広東育ちの華僑。1958年から87年まで、中華料理店・東天閣の経理担当（のちに総支配人）として勤務したが、それまでは華僑学校の教職員をしていた。1937年から44年までは中華同文の職員、51年から57年までは大阪中華学校の教員だった。54年に大陸政権を支持する華僑聯誼会の初代事務局長となるなど、中華民国政府の指導のもとにあった大阪中華学校と相容れない言動から大阪中華学校を辞職に追い込まれている。詹永年（1926年生）は中華料理店・神仙閣の副社長を務めた人だが、中華同文設立時の理事長・詹廷英の息子で、1939年合併前

の中華公学最後の卒業生である。王曰英、曾廣仁とは一時期、大開小学校時代を教員として共に過ごした関係にある。筆者の両親である王曰英と曾廣仁には生前に聞き取りを行い、詹永年には2017年に王曰英の残したアルバムを見てもらいながら、記憶をたどってもらった。17年の7月に2回、8月1回、9月2回、10月2回お会いした。また、聞き取った内容の裏付けとなる外交史料館所蔵の資料や東洋文庫所蔵の汪精衛政権駐日大使館の資料、戦後の神戸で発行された華僑自身の手による刊行物にも当たり、参考にした。

1 華僑学校の略史

1899年華僑同文学校の開設

清朝末期の1898年、光緒帝の支持のもと、康有為、梁啓超など変法派の推進した戊戌の変法（政治改革運動）の一環として中国の国内外で近代式の学校を作ろうとした。日本では、横浜で1898年（明治31年）春に変法派の徐勤が初代校長となり、大同学校ができた^(注1)。

一方、神戸でも1898年秋には華僑学校設立の声が起こっていたが、戊戌の政変（西太后らによる反変法派のクーデター）の難を逃れ、日本に亡命していた梁啓超は、99年5月28日、神戸の神阪中華会館で広東人およそ200人を前に演説し、横浜大同学校と同様に、在神華僑子弟のための学校を興すべきことを訴えた。やがて中華会館総理・麦少彭らの奔走により、その年の9月、中山手通3丁目（現在の神戸トアロードホテル山楽）に神戸華僑同文学校（広東語使用）を設立した。翌1900年3月1日、新校舎が落成し開校式を開いた。初年度は121名でスタートしている（中華会館2013：106-108）。1906年章程を定めて清国政府の学部に登録している。1914年には領事を介して中華民国教育部に登録している（中華会館2013：151）。

華僑学校の増設と本国との緊密な関係

中華会館編『落地生根』によると、第一次大戦の好景気を受け、1910年代から20年代にかけて阪神地区の華僑人口は雑業者の増大に伴って激増した。これに伴う児童の増加で、華僑同文学校とは別に、14年に神戸華強学校（広東語使用）が中山手通2丁目（現在の生田税務署）に新設され、9月6日に新築校舎が落成した。さらに、19年2月には、北長狭通5丁目三江公所内に中華学校（北京語使用）も新設された（中華会館2013：150）。

1920年、同文、華強、中華の三校の教員代表が北京の全国国語講習会に参加し、帰国後三校の教職員によって「学語研究会」が発足し、北京語の教育と普及の取り組みが開始された。また、20年秋には華北における自然災害への義援金募集の目的で学校が中華会館で演芸会を開催するなど、本国との緊密な関係を保持している（中華会館2013：151）。

華僑学校の統合

1914年神阪中華会館を会場に「神阪華僑教育統一協会」が組織され、既存の同文、華強、中華の合併を議論している。日本の外務省から建築補助費を受けることを決定したが、反対する者があり、事態の進展を見なかった。1927年、統一協会委員と三校の幹部が三江公所に集まり、統一協会の新役員を改選し、三校の合併と校舎の建設を促進することとなった（中華会館2013：151-152）。

華強学校が経営難に陥り、28年中華会館理事会が直接経営することとなった。同様に中華学校も経営危機に見舞われていたため、同校協理（副理事長）で中華会館理事長でもあった何世錫が中心となり、中華会館による両校の合併が図られ、神阪中華公学（校）と改称し、国語（北京語）による教育が行われることとなった。翌29年、神戸総領事館を経由して教育部に登録申請した。31年7月には華強学校の校舎の拡張工事が完了し、神阪中華公学の校舎が落成した（中華会

館 2013 : 152-153)。

しかし、1931年9月18日の満州事変の発生により、華僑が続々と帰国し、神戸華僑の人口は年初の4千人余から事変以降は2千800人以下になった。翌32年1月28日には上海事変が発生し、学生が激減した。華僑同文も一時的に休講に追い込まれた(陳徳仁 1984 : 522)。

戦況が悪化するにつれ、日本政府は全国的に統制を強めていくが、華僑組織もその影響を受け、日本の官憲の指導と干渉のもと合併を余儀なくされた。神戸では、1939年1月に入り、出身地別の商人団体である広業公所(広東系)、三江公所(浙江、江蘇、江西系)、福建公所が合併し、中華総商会となった。同時に、総商会内に学務委員会が設立され、華僑の教育事業を指導し、学校を運営することになり、同年8月に華僑同文と中華公学も合併することになった(中華会館 2013 : 205)。

合併しても学校を取り巻く環境は厳しさを増していた。1943年(中華民国32年)12月13日、神戸総領事から汪精衛政権(中華民国南京政府)駐日大使宛にて、中華同文への経費補助を要望する文書が受け付けられている。内容の骨子としては、華僑の各種事業が不振で、全ての物価が高騰するなか、学校を維持し、教員が生活を維持するのが難しくなっている。年間支出が5万8千余円に対し、収入が3万余円で、華僑が努力してもこの金額を埋めることは難しいとある。

この資料が入っている「汪精衛政権駐日大使館文書」は、東京の汪精衛政権駐日大使館で作成・送付あるいは受理された文書が収められているもので、現在、東洋文庫に所蔵されている。汪精衛政権は1940年3月30日から45年8月16日まで存在していたが、東洋文庫に保管されているのは1943年(5月以降)と44年の2年分だけである。分量は簿冊54冊、約2,200件の文書である。上記の文書は第36冊に入っている(東洋文庫による目録整理番号は36-002)。なお、この文書には「参考文書」として中華同文の概況、昭和18年度(1943年度)の

収支予算書、教職員一覧、時間割、生徒数が添付されており、当時の同校の様子を知ることができる。

これによると、合併後も旧華僑同文の校舎（中山手3丁目外52番）を本校とし、旧中華公学の校舎（中山手2丁目128番）を分校として、引き続き使用している。分校では初等小学1年から4年までの授業を行い、幼稚園、高等小学5、6年、中学1、2、3年の授業は本校で行っていた。中学校の教員は中国国内で中学校の教員資格（大学卒業）を有する者、小学校の教員は国内で小学校の教員資格（省立、市立の師範学校卒業）を有する者を基準とし、必要に応じ、日本人教師が日本語、体育などの科目を教えている。教材は国民政府編纂の小学校、中学校の教科書を使用し、国語で授業を行っている。昭和18年度のクラス数は、中学校が3クラス（つまり各学年1クラス）、小学校9クラス（初等小学7クラス、高等小学2クラス）、幼稚園3組で、学生の総数は583名であった。

教員総数は16名、内訳は李校長、李教導（教務主任）、小学校担任9名、中学校担任1名、科目担当日本人教員1名、幼稚園2名、もう1名は校長相談役兼科任（科目担当教員）。彼の担当科目は日本語、体育。他には、庶務2名、看護婦1名、中学校1年の担任と図書館係兼小学校教員は物色中と記載されている。なお、この「相談役」というのは、みなの間では中国語で「顧問」と呼ばれていた日本人で、実は当局から派遣された監視役であった。詹永年氏に1944年7月の卒業式の集合



写真1 中華同文学校の戦前最後の卒業式（1944年7月撮影）

表 1 中華同文学校教職員一覧 (1943 年 12 月現在)

職名	姓名	原籍	受持科目	月給	備考
校長	李萬之	天津	地理、歴史、公民	250	2- 左 8
教導	李蔭軒	北京	国文	180	2- 左 3
校長相談役兼科任教員	小野田俊夫	兵庫	日文、体育	175	2- 左 13
教員兼六年級主任	李文琨	天津	国語、算術、常識、美術、労作	135	2- 左 2
訓育兼四年級主任	林清水	福建	国語、算術、常識	135	
中二年級	王寿松	福建	数(学)、物理、化(学)	165	2- 左 1
五年級主任	陳根霖	広東	国語、算術、常識、自然、体育	130	2- 左 15
三、四年級主任	楊菴羅	北京	国語、算術、常識、音楽	120	4- 左 1
三年級主任	張義平	北京	国語、算術、常識、体育	120	4- 右端
二年級甲組主任	孫歩英	広東	国語、算術、常識、美術、労作	120	
二年級乙組主任	甘亦雅	広東	国語、算術、常識、労作	100	3- 左 3
一年級甲組主任	李素琴	福建	国語、算術、常識、美術	100	
一年級乙組主任	王曰英	江蘇	国語、算術、常識、工作、音楽	120	4- 左 2
科任教員	片山福惠	奈良	日文、唱遊、音楽、工作	130	5- 左 1
幼稚園主任	招瑞娟	広東	国語、算術、故事、音楽	120	3- 左 1
幼稚園助教、庶務	廖菊容	広東	国語、遊戯、積木、静息	80	3- 左 2
庶務	曾瑜生	広東		85	5- 右 3
庶務	莊恭握	福建		80	
看護婦	植田ソノ	兵庫		85	
中一年級	物色中			160	
図書館係兼小学教員	物色中			120	
		教員欠	員ノ為メ各教員ノ時間担当費	55	

教導：教務主任、科任：科目担当、主任：担任。科目名は原文のまま。李文琨は李平凡のこと、曾瑜生は曾廣仁のこと。備考には写真 1 において写っている位置を示す。たとえば、李校長の「2- 左 8」は 2 列目左から 8 番目を示す。

写真を見てもらったところ、最前列に座る彼を指して顧問だと指摘した（写真 1 参照。教職員などの個人名は表 1 参照）。

各学年のカリキュラムも記載されているが、日本語の授業は筆者が通っていた 1960 年代と同じく小学 3 年で初めて登場する。日文のコマ数は小学 3、4 年で週 2 コマ、5、6 年で週 4 コマ、中学校になると英語の授業も始まり、日文（中学 2 年から科目名が日語に）が週 4 コマ、英文（中学 2 年から科目名が英語に）が週 4 コマとなっている。

2 教員・王曰英の来日の経緯

1922年12月13日北京市西城区広寧伯街半截胡同で生まれている。父親は王継根（喬恒。1896年—1969年）、母親は孫聯玉（1900年—1977年）で、13人兄弟の3番目。上に兄と姉、下に弟3人、妹7人（うち弟1人、妹1人は夭折している）。父親は江蘇省崇明島（現在は上海市に帰属）出身だが、南京を経て北京に来た。曰英の話では、父親の専門は英語で、北京師範大学で教鞭を取ったことがある。のちに北京光華女子中学や第二女子中学で教務主任、北京市立第一女子中学で校長などを歴任している。曰英の母方の祖父は清末の将軍で、二品の身分であったという。その後陸軍中將になり、南京の玄武湖近くに屋敷を構えていた。

曰英は裕福な家庭で育っており、北京の実家は四合院作りの屋敷で、父親は周辺の何軒かの家の家主でもあった。西什庫天主教堂（北京市内の南北にそれぞれ一つずつカトリック教会があり、こちらは北堂と呼ばれている）で家族らは洗礼を受けたようで、曰英も西什庫天主教堂の斜め向かいにある教会付属の光華女子中学に通っていた。学校へは人力車で送り迎えしてもらっていたという。その後、曰英は北京市立師範学校（3年制）を卒業し、鮑家街小学校で教え出していた。

1943年夏、曰英は李万之校長の誘いによって、中華同文の教員として神戸にやってくることになる。李万之校長は、最初は1935年から単身で来神し、中華公学、中華同文（39年に中華公学と華僑同文が合併して）で一教員として教鞭を取っていた。41年の夏季休暇で一時帰国した際、校長に辞表を書き送った。表向きは健康上の理由であったが、中国国内の教育をそのまま持ち込もうとする校長の教育方針と合わなかったことが本当の理由らしい。しかし、学校の理事たちの強い要請により、中華同文学校の校長に就任することになった。本腰を入れて、華僑教育に打ち込むにあたり、彼は妻子も連れていくことにした。また、理事たちとの間で意見交換の書簡を数回交わす中で、

心身ともに健康で、熱意のある若い教員を連れてくることを託された（王 2004:81-82）。

なぜ日英は李氏の誘いに乗って日本へ渡っていったのか、今となっては定かでないが、少なくとも、彼女自身はせいぜい1年か2年のつもりでいたようである。当時の北京は親日的な華北政務委員会（中華民国臨時政府が改編されたもの）の管轄下であり、実質的には日本軍の支配下にあった。そのため、通行証さえあれば、旅券の取得なしに日本に入国できたそうである。そして、彼女にとって、日本に行くことはさほど心理的ハードルが高くなかった可能性がある。1940年か41年ごろと思われるが、父親の王継根は偶然のきっかけで出会った小川一朗（北京城北国民学校訓導）と親しくなり、お互いに日本語、中国語を教え合う仲になっていた。当時、王継根は城北国民学校の学区内にあった北京第二女子中学の教務主任で、小川がこの隣に下宿した関係で知り合った。当時、北京には5万人の日本人が居住し、日本人小学校も増加し、中国との小学生との親善交流が行われていた。その後、第一女子中学校校長になっていた王継根は日中学童親善会で中国側代表として挨拶に立ったこともある（小川 1994：86-87）。その縁もあり、長男・日昌が土木建築を学ぶため日本大学に留学した際は、よく小川邸に遊びに行ったそうである（小川氏談）。また、43年には、妹・日和が奈良女子高等師範学校、弟・日才が九州帝国大学に留学するため、日英より一足早く日本に出発している。日英のアルバムを見る限り、44年から45年にかけて日英と弟、妹は神戸で二度ほど会っている。

1943年8月26日、日英は父親とともに北京を出発し、天津で同行者と合流した。天津には2日間滞在し、天津東駅で父親に見送られて汽車に乗った。これが彼女にとって父親との最後の別れになるとは、この時は夢にも思わなかった。一行は山海関、奉天、新義州を經由して釜山に着き、関釜連絡船に乗り、下関に着いた。10月には米軍潜

水艦による攻撃が始まり、この時に安全航行できたのは幸いであった。下関からは山陽本線に乗り、三宮駅に到着したのは9月5日午後であった。一行は、李万之校長一家4人（妻、長女と長男含む）、李蔭軒教務主任一家4人（妻、2人の息子を含む）、男性教員2人（李平凡、張義平）、女性教員2人（王曰英、楊菴羅）の合計12人であった。

詹永年の話では、三宮駅には詹親子らが迎えに行き、永年の父親で、中華同文の理事長であった詹廷英が校長一家を南京町の東端角にあった「緑の家」（外観が緑色だったので、そう呼ばれていた）に案内し、住ませた。他の教員らは中華同文分校（旧神阪中華公学校舎）に案内し、1階に住ませた。上述の「参考文書」の教職員一覧によると、李平凡（文琨）は6年生担任、張義平は3年生担任、王曰英は1年生乙組担任、楊菴羅は3年、4年の担任となっている。曰英の記憶では、李平凡は美術科の科任教員（教科担当教員）、張義平は国語の科任教員だった。つまり李平凡、張義平は他の学年の美術や国語の授業も担当したと思われる。また、楊菴羅は王曰英の母校である北京師範学校の1級下の後輩であった。

3 職員・曾廣仁の終戦直後までの経歴

1917年、神戸で父親・曾占魁（曾家11代目。1860年—1924年）と母親・謝氏との間に生まれた。先妻・鄭氏の生んだ異母兄弟も含めると、兄弟7人、姉妹4人。廣仁は六男。1921年4歳のとき、母親に連れられ広東省中山県の田舎に戻った。24年に神戸にいた父親が他界したが、父親のことはほとんど覚えていない。後に大人たちから聞いた話では、父親占魁は20歳前後（1880年代?）で来日。そのころはまだ結婚しておらず、どんな職業についていたかは不明。来日の目的はいわゆる「白手起家」の出稼ぎと思われる。その後日中間をしばしば往来した。中国で結婚し、妻子を連れて来日している。初来日時の到着港は横浜で、居住地も横浜だった。関東大震災後に神戸に移っ

てきた。

1910年代に日本で買った中国のロト式の宝くじで、日本円10万円が当たる（日本政府の認可がおりていないヤミの宝くじ）^{（注2）}。それを元手にいろいろな商売に手を出すが、商売の経験がなく、友人や親戚の話の聞いては商売をやるが、どれもうまくいかなかった。華僑向けの食品や日用品の店を開くが、中国から輸入した品物が良くなく、売れずじまいであったこともある。

占魁はイトコの紀禄（字は弗臣）が香港チャータード銀行神戸支店の買弁（仲介人）になるための担保料2万円を肩代わりした。紀禄の下にはその息子やオイらが働いていた。また、占魁の兄・見魁の息子たちや占魁の長男、次男、三男、五男らも一時期神戸にいた。

1926年小学3年生の時、神戸のほうが教育環境がより良いということで母親が廣仁を神戸に戻らせた。異母兄・廣栄の家で暮らし、華僑同文（廣東語教育）2年に編入したが、学費の支払いがさほど厳格でない中華公学（国語教育）に転校した。

1931年九一八（満州事変）が勃発し、廣栄の妻が息子、娘を連れて中山県に戻るのに同行し、帰郷した。しかし、一族の男たちは引き続き神戸に残った。廣仁も1937年、中山県の中学校を卒業すると再び神戸に戻った。知り合いが中華同文のコックを勤めていた縁で、中華同文の職員となる。異母兄・廣栄の家族が多く、家が手狭だったので、中華同文（分校である旧中華公学の校舎1階）に住むようになった。彼の名は廣仁だが、字（あざな）として瑜生を使用していたようで、1941年11月20日中華民国駐神戸総領事館発行の「華僑登記証」に掲載されている姓名は曾瑜生となっている。また、上述の汪精衛政権駐日大使館が受け付けた駐神戸総領事館からの書類に添付されていた参考文献にも、庶務係曾瑜生と記載されている。

40年から学校の職員を続けながら、京都の立命館大学の夜学に通いですが、特高警察に付きまとわれ、一年半後には勉学を諦めること

になる（後述）、そうこうするうちに、42年4月には神戸も初めて米軍の空襲を受けるようになり、戦争の恐怖を身近に感じるようになった。廣仁は空襲を一番恐れており、いざとなれば中国に戻れるようにしたいという思いから、下関に設立された中華民国南京政府神戸総領館下関弁事処の「雇員」として勤務することにした。帰国者への証明書発行などを主な業務として行っていたようである。まがりなりにも日本の友好国の公館であったが、そこでも特高警察が出入りし、廣仁にたかることもあったという。

幸いにして下関でも神戸でも直接空襲に遭うことはなかったが、下関、神戸双方で加入していた家財道具にかける罹災保険が降り、さらに南京政府からの救済金も入った。これを元手に戦後すぐに三宮で食堂を始め、46年からは中華同文の教員との二足の草鞋、47年からは学業（関西学院大学に入学）との掛け持ち生活が始まった。

以上彼の出生から終戦直後までの生涯前半を紹介したが、居住地から見ると、広東と神戸、下関と神戸との間を往復する生活で、独身時代の彼にとって必ずしも神戸が彼の定住地ではなかった。

4 戦中・戦後の教職員の体験

4.1 監視下の生活

日本人顧問と特高警察

李平凡の回想（李 2000）によると、1943年来日時に2冊の愛読書、エドガー・スノーの『西行漫記』（邦題『中国の赤い星』）と艾思奇的『大衆哲学』を持参した。露見しないために、下関に着く前に表紙を小説本のものに取り替えている。彼は天津で秘密の読書会を組織していたが、この2冊とはそこで出会ったのかもしれない。

また、李平凡は来日前から魯迅の影響を受け、版画制作を行っていた。彼は版画を通して中国社会の真の姿を描こうとした。そして、日本に来てから、すぐに日本華僑新集体版画協会という組織を作ったが、

当局には「赤の活動」をしていると疑われ、中華同文の教員のなかでも特に目をつけられるようになった（李 1983：28-33）。

当時、中華同文には周りの教職員が「顧問」と称する日本人（特高警察と思われる）が常駐しており、自身は日本語や体育を教えながら、教職員や学生の言動を監視し、校長の「相談役」として校務に関与していた。また、兵庫県庁外事課勤務の鴻山俊雄は頻繁に華僑学校や華僑の居住地に入り、監視の目を光らせていた。李平凡も李校長からは気をつけるようにと言われていた。

李平凡は同文の分校 1 階に住んでいたが、用務員の翁阿来（皆から阿来さんと親しみを込めて呼ばれていた）も同じ 1 階にある用務員室で寝泊まりしていた。翁は非識字者だったが、李に『西行漫記』を読み聞かせてもらうのが大好きであった。翁はこの本が禁書だということを察し、李に代わって用務員室でこの 2 冊の本を隠すことを自ら申し出た。43 年 11 月末のある日の朝、鴻山と 4 人の特高が宿舎を強制捜査し、ある事件と李平凡が関係しているだろうと迫った。この事件について筆者が日英に尋ねると、特高は校内を搜索するとともに、日英ら同僚にも尋問したが、李にとって不利になることは決して言わなかったそうだ。

校長や学校の理事が懸命に取り成して、李平凡は逮捕されることは免れたが、日本の敗戦まで監視がつき、行動の制約を受け続けた。もし、翁がいなければ、投獄されただけでなく、生きて獄から出られなかったかもしれないと感謝の念を後に書いている（李 2000）。そして、46 年に中華同文が復校後は、この 2 冊の本は、小学校高学年や中学生の国語の教材になった（李 2000、2003）。

当局の監視対象は特に男性に向けられていた。同文学校では李平凡以外にも目をつけられた者がいる。曾廣仁である。彼は 1937 年神戸に戻ると、同文学校の職員（庶務）として働くようになり、その後、図書館係も務めるようになった。彼は職員のままにいることに飽き足

らず、40年になると、一念発起して、京都の立命館大学二部（経済学）に入学した。昼間は同文学部に勤務しながらである。しかし、一年半で退学している。当時、外国人が居住地を離れ、他県へ移動するには、県の外事課で許可証をもらう必要があった。廣仁によると、取得した許可証は1年間有効のものであったが、ほぼ毎日、京都からの帰路、車中で特高の検査を受け、一日の行動や誰と会ったかなどを尋ねられた。通学に非常に不便を感じて、退学したのである。

神戸華僑に対する激しい弾圧

戦争中、神戸の華僑に対する弾圧が三度あった。このうち前の二回は国民党関係者、三回目は呉服行商人に対する弾圧であった。当時、国民党神戸支部は中部、関西、中国、四国各地の活動を統括していた。

一回目は満州事変後の1931年9月15日、楊寿彭、鮑穎思、宋炎ら13名が一斉検挙された。検挙理由は「外諜容疑」であった。確かな証拠があつてのことではなかったが、鮑穎思、宋炎は香港に強制送還された。楊寿彭は出獄後の38年1月に獄中生活がたたり亡くなっている。二回目は盧溝橋事件発生後の37年12月12日の一斉検挙である。この月の『特高外事月報』によると逮捕者は神戸20名、大阪35名、京都24名、長崎79名、全国で295名であった。これは在日中国国民党員を対象としたもので、諜報網の破壊にあつた。なお、38年1月にも神戸で2名の国民党員が検挙され、送還されている。これにより日本の国民党組織は壊滅した（中華会館2013：197-201）。

華僑団体の再編

日本の華北、華中への軍事的進出とともに、現地地でカイライ政権が樹立されている。1937年12月14日北京に中華民国臨時政府（王克敏委員長）が、38年3月28日には南京で中華民国維新政府（梁鴻志主席）が成立した。これと前後して、38年1月16日には、日本政府

は重慶の国民政府を相手にせず、カイライ政権と提携して中日戦争を解決する方針を打ち出した（第一次近衛声明）（中華会館 2013：201）。

そして、日本当局は在日華僑に対して、①こうしたカイライ政権を支持すること、②神戸華僑と南洋華僑との関係を利用して、南洋華僑を日本支持に向かわせることを求めた。

具体的には、兵庫県外事課の斡旋により、38年7月に神戸華僑新興会が結成され、「日華提携、臨時政府支持」の方針を決議した。8月には重慶国民政府の神戸総領事館が閉鎖され、そのまま臨時政府駐神戸僑務弁事処兼維新政府代表部となった（40年8月1日中華民国駐神戸総領事館に格上げ）。また、39年1月には出身地別の商人団体である広業、福建、三江の三公所が解散し、合併して神戸中華総商會が結成され、中日親善、貿易振興が目標とされた（中華会館 2013：201-205）。

1938年11月に日本の近衛内閣が行った日・満・華による東亜新秩序の建設の呼びかけ（第二次近衛声明）に応じ、汪精衛は「東亜新秩序建設週間」を提唱した。神戸の新興会はこれに呼応して、39年2月28日に中華会館で「東亜永久の平和確立大会」を開催している。汪は38年12月に重慶を離脱し、40年3月に南京で南京国民政府を樹立したが、臨時政府と維新政府は南京国民政府に編入されている。これと軌を一にして、40年3月6日には、日本政府のお膳立てで全日本華僑総会が結成された。この会は全国の華僑団体の大同団結、日華両国の親善提携、東亜新秩序建設への翼賛、僑胞全体の福祉増進を目的としている。神戸の新興会会長・何芍筵が総会の会長に就任している。さらに、3月30日には神戸の中華会館で南京国民政府の樹立を祝う式典「国民政府還都慶祝大会」が開催され、新政府への支持を表明している（中華会館 2013：205、207）。

神戸華僑、そして全国の華僑はこうした態度表明と言動により友好

国の国民として扱われ、敵国人が収容される抑留所に入れられることを免れた。また、神戸華僑は団体、個人それぞれ国防献金、恤兵献金、災害義捐金（38年7月の阪神大水害に対する）を拠出している。しかし、華僑が当局による監視と迫害から逃れられたわけではない（中華会館 2013：205-206）。

戦争末期、1944年8月、福建出身の呉服行商人12名が大阪の特高警察に連行され、ひどい拷問を受けた。連行理由は「通敵」ということであったが、身に覚えがない。呉服行商人は職業柄、移動するので、目立った可能性がある。12名中、6名が獄中で殺害されるか、拷問のせいで帰宅後に死去している。魏子雄は呉服商組合会長だったが、夜中に叩き起こされ連行された。天井に吊るされたり、水槽のなかに頭をつっこんで息が切れる寸前に引き上げるといった拷問を繰り返し行われた。幸いにして彼は生き延び、終戦によって釈放された。その長男の魏振昌によると、戦争中にこのようなことがあったが、近所の人たちはとても親切にしてくれ、お菓子が配給になると分けてくれたり、母親も料理を作ると近所に持っていったりして仲良くお付き合いをしていたという（中華会館 2013：214-217）。

4.2 校舎の焼失と避難生活

戦時中最後の卒業式

1939年に神戸華僑同文学校と神阪中華公学が合併後も、二つの校舎を利用して。分校（中華公学）では小学1年から4年生まで、本校では幼稚園、小学5、6年生、中学部の授業を行っていた。医務室も本

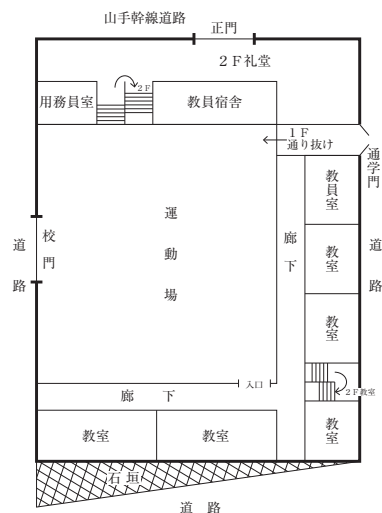


図1 中華同文学校分校（旧神阪中華公学）見取図（詹永年氏作図による）

校にあった。図1は中華同文学校分校（旧中華公学校舎）1階の見取図である。詹永年が中華公学に通っていた頃の記憶に基づき作成したもの。詹氏によると、多くの生徒は学校の南側の道（石垣のある道）を通過して、通学門（東門）から校内に入っていた。北側の山手幹線道路に面した正門（大校門）や西側の校門は普段は開けていない。東棟校舎と北棟校舎とはつながっているが、1階部分は通り抜けできる。また、詹氏によると、合併後の中華同文の医務室、音楽教室、理化教室などはすべて本校（旧中華同文の校舎）にあり、分校には中華公学時代にもなかったようだ。なお、詹氏は中学校からは日本の学校に通ったため、あまり馴染みのない本校の見取り図はもっとラフなものになっている（ここでは割愛する）。

写真1は中華同文学校の戦前における最後の卒業写真である。幼稚園、小学部、中学部が合同で卒業式を行っていた。撮影は1944年7月の中旬、分校（旧中華公学）の運動場で、北棟校舎（教員宿舎エリア）を背景に運動場の南側から撮影されている（図1参照）。詹氏によると、卒業式は毎年7月15日ごろ、開学式（始業式）は9月15日ごろにある。夏休みは2か月あるが、国内から来た教員はこの期間を利用して帰国できるようになっていた。

写真1は神戸華僑歴史博物館にも所蔵されているが、戦時中および大開小学校時代の理事や教職員にどのような人たちがいたのか明確に記録されていない。生前の王日英に、写真を見ながら覚えている限りの人名を挙げてもらった。今回改めて詹永年にも人名を挙げてもらった。同定にあたっては、汪精衛政権駐日大使館が受け付けた上述の「参考文書」に記載されている教職員名を写真1と照合した。

写真1の説明をすると、1列目は幼稚園卒園生、3列目、4列目は小学卒業生、5列目、6列目は中学卒業生と思われる。椅子に座る2列目は学校の校長、教務主任や総理（理事長）、董事（理事）、元総理らがいる。なお、右から3人目は校長の「相談役」として入ってきた

日本人教師。実際には監視役だった。教員は2列目から5列目の左端に固まり、2列目右端にも2名、4列目右端にも1名いる。4列目、5列目右端にも男性教職員がいるものと思われる。

理事クラスの人名を挙げると、2列目左から4周浄強（学校理事。中国語で董事）、5 曾蒞臣（学校理事）、6 潘植我（前学校理事長）、7 藍拔群（元学校理事長）、8 李万之（校長）、9 詹廷英（学校理事長。中国語で総理）、10 呉振東（神阪中華會館理事長）、11 易彝伯（学校理事）、12 招協衡（学校理事）である。

教職員については、表1の備考欄を参照してほしいが、2列左14の果浩東（教員）は表1に登場しない教員である。参考文書では「中学校1年の担任を物色中」とあったので、新規採用された可能性がある。同じく物色中とあった図書館係については、曾廣仁は後に自分が図書館係になったと語っていた。また、確定できなかったものの、3列左4または4列左3は李素琴（教員）、植田ソノ（看護婦）のいずれかで、4列目右2、右3や5列目右1、右2は孫歩英（教員）、林清水（教員）、莊恭握（庶務）の可能性がある。なお、3列左3の甘亦雅は幼稚園の教員というイメージが強いが、参考文書によるとこの時点では小学2年生の担任となっている。

米軍機による空襲

主に男性華僑への監視と弾圧はあったものの、日華親善、南京政府支持を表明していたため、在日華僑は敵国人を収容する抑留所に入れられることはなかったことはすでに述べたとおりである。日常生活において、偏見や差別がなかったわけではないが、住民として食糧などの配給に並ぶことや防火訓練にも参加した。戦時中を知る多くの華僑は、ご近所の人たちは親切にしてくれたと証言している。

戦況が不利になるにつれて、米軍機による本土への無差別爆撃が始まった。神戸への空襲は1942年4月18日、B25一機による焼夷弾投

下が最初だったが、45年に入ってB29による本格的な空襲が始まった。この年の1月から終戦前日の8月14日までの80日余り、約130回に及ぶ都市無差別爆撃が行われた。このうち最も激しかったのは、3月17日、5月11日、6月5日である。3月17日の空襲では、長田区（1945年までは林田区の名称）など神戸市西部の被害が大きく、生田区（45年までは神戸区の名称）にあった中華同文は被害に遭わなかった。詹氏によると、むしろこの時は母親を連れて中華同文学校に避難したという。5月11日の空襲では神戸市東部、特に川西航空機工場が主目標となったが、華僑挺身隊に加わり、工場で働いていた李校長の長女と李教務主任の2人の息子が亡くなっている。華僑の若者たちも勤労働員に参加していたのである。そして、6月5日の空襲では、神戸市の中心部もほとんど焼失しており、この時の空襲で中華同文学校の本校、分校、中華会館、関帝廟など華僑関係の施設がすべて焼失してしまった（中華会館 2013：218）。

墓地での生活

6月5日の空襲で中華同文学校の校舎が焼失してしまい、分校で暮らしていた教員たちは命からがら逃げることができた。無我夢中で逃げたため、日英もどこをどう歩いたのか覚えていない。しかし、日英の話しや学校のあった中山手通以南が特に被害が大きかったことを考え合わせると、あまり被害に遭っていない北側（北野、諏訪山方面）へまず逃げ、その日のうちに長田区滝谷町にある中華義荘（華僑の墓地）までたどり着いたものと思われる。老華僑の教職員で親戚がいる場合は、そこを頼ることができたが、中国から来た校長一家、教務主任夫婦、教員と用務員の翁阿来は墓地で暮らすしかなかった。

義荘では管理人一家の家があり、そこに泊めてもらったようだ。日英によると、義荘では棺桶置き場が近くにあった。異郷である日本で亡くなると、棺桶に入れて、上海や香港経由で故郷に戻す帰葬の習慣

があったが、戦況悪化で海上が封鎖され、送還できなくなっていた。そのため、安置している棺桶のなかには遺体が入っているものもあり、気味が悪かったそうだ。その上、住み始めた当初は蚊に刺されることに悩まされ、顔中赤く腫れていたという。市内の父兄の家に住めるようになった人もいたが、その年の末になっても、新しい住まいと授業再開のめどは全く立っていなかった。

ところで、日英の話しや詹氏の話しからは中華義荘に避難し、暮らしていたのは43年に中国からやってきた校長一家、教務主任一家、独身の4人の教員と用務員・翁阿来さんだけの印象をずっと持っていた。しかし、避難していた期間の長短は分からないが、もっとたくさんの人が義荘に身を寄せていたようである。

外交史料館に所蔵されている戦前の資料「在本邦外国人ニ関スル統計調査雑件」に収められている「在留外国人名簿（昭和17、18年）」には全国の在留中国人が住所、職業、氏名、年齢、性別の順で列举され、世帯単位で並んでいる。ところが、長田区滝谷町一丁目中華義荘の住所に合計38人の名前が挙がっており、1945年6月6日以降、場合によっては終戦直後のデータが紛れ込んでいた。内訳を見ると、料理職とその家族20名、帳場1名、給仕9名、同文学校校長と家族5名、そのほかに李教務主任と翁阿来が料理職として掲載されている（理由は不明）。一方、実際にはいたはずの王日英ら独身教員の名前は掲載されていない。これらの人たちを加えると40数名が中華義荘に避難していたと思われる。管理人室以外にいたであろう彼らがどうやって雨露を凌いだのかはわからない。詹氏もこれらの人たちについては全く記憶にない。

ところで独身教員の名前がなぜ掲載されていないのか。少なくとも王日英の場合は、一つの推測が成り立つ。彼女は45年6月30日付で長田警察署に旅行申告書を提出し、同日付の出国許可書（県知事発行。出国期限45年8月20日まで）と旅行許可証が発行されている。旅行

許可証には、現住所として「神戸市長田区滝谷町一丁目一ノ一三中華義荘内」、旅行目的として「空爆ニ依り就職場所及居住焼失セルヲ以テ本国ニ帰国ノ為メ」、行先地及往復経路として北京の実家の住所と43年に日本へ来た時を逆に辿る行程が書かれている。また、7月26日付の特殊回国証明書が発行されている。中国語の文面で、中華民国総領事館発行のものと思われる。記載事項として、事由「罹災疎開」、到達地点「北京」、經由何処「関釜、奉天、山海関」、有効期間「二個月間、自8月26日至9月25日」（原文のまま）とある。結局、海上封鎖で関釜連絡船が不通状態だったため、帰国できなかった。書類上は日本にいないことになっていた可能性がある。華僑教育に生涯を捧げる覚悟で来日した校長や教務主任と違い、日英は1、2年後には帰国するつもりでいた。他の独身教員たちも日英と同じように出国手続きを行い、書類上は抹消されている可能性が考えられる。

4.3 大開小学校での間借り生活

1946年6月6日の復校慶祝大会

李校長らが華僑墓地での避難生活を続けるなか、詹廷英総理（理事長）らは学校の再開を模索していた。かねてからマッチの製造や輸出で良好な関係にあり、中国に理解のあった関西経済界の重鎮、滝川儀作の尽力により、詹廷英らは直接神戸市長と交渉し、焼失を免れた兵庫区の大開小学校の校舎の半分を借りることができた。大開小学校は学童疎開によって生徒がいなかったため、しばらく開校できないでいた。校舎は3階建てで、一部は鉄筋コンクリートであった。各階ごとに神戸市水道局と中華同文学校で分け合って使うことになった。詹氏によると、中華同文の校舎が焼失し、中華義荘で暮らしていた教員たちのうち、45年10月頃に、李校長とその息子、李教務主任、李平凡、用務員の翁阿来が、詹永年とともに大開小学校で住み始めた。夜は用務員室でみな雑魚寝した。まだ寒くはなかったが、窓ガラスはなく、電

気は回復しておらず、夜トイレに行くにも、蠟燭を持って行った。壊れた水道からは水が四六時中垂れ流されている状態であったという。とても義荘に残っている人たちを呼べる状態ではなかった。総理の息子である詹永年は英語が話せたので、市役所に掛け合うだけでなく、直接駐留米軍にも掛け合い、ガラス窓を調達してきた。年末までには電気も通じるようになった。小学生時代の同級生だった福建和や職員は何東郷もよく手伝ってくれたという。46年1月には義荘に残っていた教員やその家族も移ってきた。

6月6日に滝川儀作を招き、復校慶祝大会の式典を3階講堂で行い、9月から正式に授業を再開した。中華同文では6月6日を復校記念日(学校再建記念日)としているが、これは6月5日の神戸大空襲を忘れないためである。

この日、校舎北側の校庭への出入り口前(写真3の中央、鉄筋コンクリート校舎左手の出入り口)や中央の校舎を背景に校庭で何枚か写真を撮っているが、写真2はそのうちの一枚である。校長と教員たちを撮ったものである。写真3の建物は大開小学校の校舎である。全校生徒や大人たちも集合しているようで、女性のもんぺ姿が見える。復校慶祝大会の日か9月の開校式に撮影されたのではないかと推測される。

写真2の人名を列举すると、



写真2 復校慶祝大会での教員の記念写真(1946年6月6日撮影)



写真3 大開小学校での集会(1946年6月6日か9月15日ごろ撮影)

1 列目左 1 川中康、左 2 王曰英、左 3 周燕（艶）麗、左 4 陳蓮好、左 5 関桂枝、左 6 馬文琇、左 7 甘亦雅、左 8 鄭麗娟、2 列目左 1（留学生）、左 2 坂本一郎、左 3 詹奇峰、左 4 李蔭軒（教務主任）、左 5 李万之（校長）、左 6 曾廣仁、左 7 陳根霖、左 8 楊永信（校医）、左 9 易乃成、3 列目左 1 陳徳同、左 2 呉維中、左 3 曾廣煜（校医）、左 4 李平凡、左 5 張義平、左 6 温士琨、左 7 林政幸、左 8 尹維業。

戦前から継続して勤務する教員もいれば、新たに着任した教員もいる。その多くが京都の光華寮で暮らし、日本での留学を終えて、中華同文の教員になっているケースである（2 列左 1、左 3、3 列左 2、左 6）。もう少し後になるが、王曰英の妹・曰和とその夫・王采華（京都大学卒）も一時期中華同文の教員になっている^{（注8）}。

大開小学校時代、多くの生徒児童は生田区に居住していたため、神戸市に掛け合い、中山手 3 丁目（たばこ会館前）から上沢 2 丁目まで有料の専用電車を走らせてもらった。朝の 7 時半ごろになると、中山手 3 丁目の停留所に生徒を集合させ、先生が付き添って登校した。午後 3 時ごろには、上沢 2 丁目に生徒を集合させ、先生が付き添って下校した。全教員が交代でこの朝と午後の付き添いを行った。

詹氏によると、生徒たちは家からお弁当を持参したが、なかにはお弁当を持ってこれない生徒もいた。そこで、詹永年は同僚の文炎峰と共同で学校内に福利合作社を立ち上げ、うどん屋を開いた。実際に賄いを担当したのは職員・何東郷の妻だった。

やがて、自前の校舎を持つための準備が重ねられ、1959 年 9 月 30 日に現在の場所に新校舎が竣工したため、大開小学校に住んでいた教職員らはそれぞれ新たな住まいに移っていった。新校舎建設に至るまでの経緯、華僑の献身的な努力や滝川儀作氏の貢献などについては、李万之校長や陳徳仁（1958 年から 69 年まで中華同文の理事長）が『学校法人神戸中華同文学校八十周年記念刊』に書かれている文章に詳しいので、ここでは省いておく。

4.4 集団結婚典礼

戦火がやんだとはいえ、戦後の物資不足は深刻だった。食糧は不足がちで、配給制になっていた。生活必需品などは闇市で買うことはできたものの、値がはるものばかりであった。特に若い人たちにとっては、盛大な婚礼を開いたり、新居を確保するのが相当な負担であった。この問題を解決するために、李万之会長の発案で、神戸華僑総会主催の会費制集団結婚典礼が開催されるようになった。参加するカップルは、親の決めた結婚相手ではなく、自由意志に基いて結婚するカップルであった。曾廣仁によると、新郎新婦は一人5,000円、つまりカップルで1万円支払うだけでよかったという。自分たちが参加したのは趣旨に賛同しただけでなく、経済的にも助かるからであったからだという。

第一回の典礼の案内によると、①集団結婚典礼は午後1時から第一楼で開催され、②それに続く祝賀晩餐会に参加する人は一人200円の会費を華僑総会事務所で支払うことになっていた。第一楼は旧居留地にある中華料理店である。詹氏によると、ビルの3、4階が店舗で、婚礼は3階の臨時にしつらえられた礼堂で行われ、晩餐会は3、4階を使って行われた^{注3}（写真4参照）。



写真4 第一屆集団結婚典礼（1947年4月10日第一楼で撮影）。左から二組目が曾廣仁・王日英。

表2 神戸華僑総会主催の集団結婚典礼参加の新郎新婦一覧（第1届から第4届）

時間	新郎	新婦
第一屆 1947年4月10日	楊永信（復校時の校医） ^{注4}	馬文琇（同文教員）
	温士琨（京大留学生→同文教員） ^{注5}	田原代志枝（京都で看護師→復校時の同文医務室看護師）
	廖某某（漢方薬店） ^{注6}	（日本人）
	曾廣仁（同文教員）	王曰英（同文教員）
第二屆 1948年1月31日	詹永年（同文職員）	招瑞娟（同文教員）
	李雲潮	邱某某
	関東源（医師） ^{注7}	陳惠顔
	蔡東涛（貿易）	董瓊華
第三屆 1949年12月23日	李文琨（平凡）（同文教員）	周艶（燕）麗（同文教員）
	李振祿（同文教員）	易鳳群（同文教員）
	鮑觀細	曾麗容
	関顕章	鄭妙顔
	陳慶華	（日本人）
第四屆 1950年3月26日	陳舜臣	蔡錦墩
	陳敏臣	葉玉枝
	胡秋金	林少篁
	陳金財	黃天女
	梁瑞●（不詳）	容似英

出典：第一屆から第三屆までは曰英の手元にあるアルバムをもとに、曰英が語ったもの。第四屆は施旅旋「神戸華僑第四屆集団結婚參觀録」『華僑文化』（華僑文化経済協会）第20号、1950年7月1日による。

表2は神戸華僑総会主催の集団結婚典礼参加の新郎新婦一覧（第1届から第4届）であるが、中華同文関係のカップルが多いことに気づく。詹氏によると、この結婚式の影響力を高めるため、初期のカップルは一定の社会的地位がある人や、有力者、名声のある人の子女が優先的に選ばれているという。たとえば、楊永信は楊寿彭（戦前の中国国民党神戸直属支部長）の息子であり、詹永年の父親と招瑞娟の父親はそれぞれ中華同文の理事長と理事であった。

ところで、曾廣仁が言う「趣旨に賛同した」であるが、文字資料としての証拠はないが、恐らく中国国内における新生活運動の影響を受けた李校長の考えに華僑の若者たちが共感したと考えられる。

新生活運動というのは1934年から49年まで、中華民国政府が推進した国民教育運動である。百度百科（中国のWeb辞書）によると、蒋介石の目には、中国人は礼儀や道義を知らず、清廉や恥を知らず、自己中心的なため、亡国の危機に直面していると映った。この運動の目的は、民衆の日常生活から変えていき、社会を改革し、国家と民族を復興させ、抗日戦争に勝ち抜くことであった。蒋介石は「礼義廉耻」（礼儀を重んじ、道義的で、清廉で、恥を知る）という理念、思想を日常生活のなかで実践することを民衆や社会に求めた。そのためさまざまな実践活動が展開されたが、たとえば、「生活の芸術化」として、道徳、秩序、公衆衛生などを内容とする歌曲を広めたり、野外旅行に出かけること、「生活の生産化」として、60歳未満の人の誕生日はしないこと、「生活の軍事化」として、軍人のように顔は水で洗うことなどが挙げられる。さらに、時間を守ることや町の美化・衛生管理の運動、識字運動、アヘン禁止運動などさまざまな取り組みが展開された。こうした国内の運動の影響を華僑社会も受けたと思われる。集団結婚典礼の実施は李校長のイニシアチブで始められたが、背景には経済的要因だけではなく、こうした国民運動の影響もあったと考えられる。

その影響を受けたと思われる文章がある。神戸中華青年会刊行の『神戸中華青年会拾周年紀念専刊』1955年に掲載された白芳の「談華僑的恋愛与結婚」である。中華青年会は1945年8月に組織されたが、のちの大陸政権支持の華僑聯宜会（72年からは華僑総会と名のる。45年に成立した華僑総会とは別組織）に発展していく組織である。この白芳の文章は当時の神戸華僑青年たちの進歩的な考え方をよく表しているように思う。長文になるが引用したい。

「華僑は現在に至るも旧礼教、旧儀式を守っている。だから、華僑の青年男女は生活能力がなければ恋愛や結婚ができないでいる。ごく普通の職員が結婚しようとする、それはとても難事であり、何年も貯蓄をし、一回の儀式で数年分の貯金をきれいさっぱり使い切ってしまう。今もこのような儀式が華僑のなかでは普遍的である。この間、校友会が行った集団結婚は華僑の結婚儀式の大改革といえる。華僑がこの不景気な社会においてもっと合理的にこれらの儀式を行い、簡便な儀式を奨励しなければならない。結婚だけでなく、他の儀式も大改革が必要である。」(白 1955、p6)

「神戸華僑にはかつて有能な女性がいた。しかし、彼女はこれらの封建(社会)の残余である腐敗した旧礼教を克服する勇気がなく、瀬戸内海に身を投げ、彼女のすべてを葬り去り、旧礼教に屈服してしまった。神戸華僑において二度とこのような事が発生しないと私は断言することができない。青年たちは彼女が精神的な支配を受けたことによって自殺したことに全く関心を持たず、恋愛には人の生き死にを左右するほどの大きな力があることを想像だにしない。」(白 1955、p6-7)

「もちろん私たちの一生は恋愛だけのために生存するのではないし、恋愛至上主義でもない。しかし、恋愛は私たちの生活様式を変えることができ、恋愛の良し悪しは今後の生活に大きな影響を与えることを私たちは理解しなければならない、…」(白 1955、p7)

引用文に出てくる校友会は中華同文学校の校友会と考えられるが、華僑総会主催の集団結婚典礼以外にも同類の取り組みがあったことが分かる。そして、この集団結婚式の実施も恐らく経済的要因だけによるものではないようだ。校友会主催か華僑総会主催かは定かでないが、

集団結婚式はその後も毎年開催され、50年代を通して行われたようである。

おわりに—まとめと謝辞

本論文は中華同文学校の教職員の体験を、写真を手がかりに当事者の記憶と関連する記録をもとに整理したものである。決して神戸華僑全体の戦争体験、戦後体験を代表するものではないが、中華同文学校の戦時中や終戦直後の大開小学校時代の様子については、『八十周年記念刊』でもほとんど扱われていない。その意味で、当時の様子を記録に残しておくことは大きな意義があると思っている。ただし、何分にも当時を知る人の多くが他界しており、十分に解明できたとは言えない。また、筆者の理解不足で記述に思わぬ誤りがあるかもしれない。不正確、不十分な点については、今後補っていきたい。

未筆ながら、王曰英の残したアルバムを丁寧に見てくださり、写真に写る人物や場所の特定を行い、学校の見取図を書くなど、70年前の記憶を蘇らせて語ってくださった詹永年氏には心から感謝したい。また、詹氏を通してその奥様で、中華同文の教員であった招瑞娟先生やご親戚の方にもご協力いただいた。また、文中で引用した外交史料館所蔵の「在日外国人名簿」、東洋文庫市所蔵の「汪精衛政権駐日大使館文書」については、兵庫県立大学の陳来幸先生、横浜開港資料館の伊藤泉美先生にご教示いただき、一部資料の提供も受けた。また、神戸華僑歴史博物館室長の安井三吉先生には館所蔵の刊行物の紹介と閲覧の便宜を図っていただいた。この場をお借りしてお礼申し上げます。

注

- 1 1897年に孫文など興中会の影響で中西学校が発足したが、翌年上海から赴任した校長は変法派で、校名も改められた。

- 2 廣仁によると、白鴿票（広東語でパカピヨ）と呼ばれる富くじらしい。千字文の最初の 80 文字（天から皇までの字）を記した紙を丸め、それをハトに選ばせ、いくつ当たったかによって賞金を得るしくみであった。新中国になる前には広東や香港、東南アジアの華僑社会で流行した。
- 3 華僑文化経済協会が発行している雑誌『華僑文化』には第四屆の典礼の詳しい様子が紹介されている。「唱礼官（儀式の進行役）周金甫の号令で、証婚人、紹介人、主婚人らが入場し、着席する。甘亦雅（華僑幼稚園園長）の先導するなか、新郎新婦が入場する。童女たちが入場しながら花を撒く。儀式は準備委員長李万之からの準備経過の報告、証婚人王昭徳による結婚証明書の読み上、紹介人代表黄進昇による新郎新婦の紹介、主婚人代表林清木による新郎新婦への訓示と来賓への謝辞、来賓代表阪神僑務処主任石専員と華僑文化経済協会会長陳義方の祝辞と続き、最後に周金甫の合図で新郎新婦が退場して終わる。退場時には周りの来賓らが五色の花葉を二人に振り掛ける。その後は記念撮影となる。午後 5 時から晚餐会が開かれ、60 卓並べられ、参加者は 600 人であった」（施 1950）。
- 4 結婚後、市内で開業。
- 5 1953 年天津に戻る。文化大革命時には下放を経験している。
- 6 南京町万生堂を韓国人と共同で経営していた。名前不詳。
- 7 トーアロードで開業。妻は医院で夫の手伝いをする。
- 8 詹氏によると、大開小学校時代の教職員で、時間の長短は別にして学校に住んでいた人は以下のとおりである。李万之と家族、何東郷（職員）と家族、黄其沃・福田静子夫妻、曾廣仁・王曰英夫妻、王采華・王曰和夫妻、井上武・雅子夫妻、李振祿・易鳳群夫妻、詹永年・招瑞娟夫妻、羅詠基と家族、曾健卿、文炎峰、柳堤、藤培修、陳相山、李平凡、張義平、楊菴羅だった。このうち、黄其沃、王采華、王曰和、文炎峰は留学生だった。なお、曾廣仁・王曰英は校舎南端の 2 階の教室を住まいとしており、筆者はここで誕生している。廊下を挟んで斜め向かいの教室に詹永年夫妻が住んでいた。

参考文献

（日文）

汪精衛政權駐日大使館（1943）

『汪精衛政權駐日大使館文書 第 36 冊僑務档案 僑民教育 1943 年』（文書番号 03-

002) 東洋文庫所蔵

王柏林 (2004)

「李万之一神戸の華僑社会に生涯を捧げた教育者」神戸華僑華人研究会編『神戸と華僑—この150年の歩み』神戸新聞社総合出版センター

小川一朗 (1994)

『北京の日本学校』朝文社

外務省儀典班 (1945)

「在留外国人名簿 (昭和 17、18 年)」『在本邦外国人ニ関スル統計調査雑件 四』外交史料館所蔵

神戸中華同文学校百年校慶慶祝委員会編 (2000)

『学校法人神戸中華同文学校建校 100 周年記念冊』神戸中華同文学校百年校慶慶祝委員会

曾士才 (2014)

「日本残留中国人—札幌華僑社会を築いた人たち」『異文化論文編』(法政大学国際文化学部) 第 15 号、p67-99

曾士才 (2016)

「日本残留中国人—札幌華僑社会を築いた人たち」今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』日本経済評論社、p191-227

中華会館編 (2013)『落地生根—神戸華僑と神阪中華会館の百年<増訂版>』研文出版

陳徳仁編 (1984)

『学校法人神戸中華同文学校八十周年記念刊』学校法人神戸中華同文学校理事会
李平凡 (1983)

「風塵録〈一〉—日中版画交流史」『記録』57号

李平凡 (1984)

「風塵録〈二〉—日中版画交流史」『記録』58号
(中文)

白芳 (1955)

「談華僑の恋愛与結婚」『神戸中華青年会拾周年記念専刊』神戸中華青年会、p6-7

李平凡 (2000)

「百年校庆有感—紀念校工翁阿来先生」神戸中華同文学校百年校慶慶祝委員会『学校法人神戸中華同文学校 建校 100 周年記念冊』神戸中華同文学校百年校慶慶祝委員会、p130-131

李平凡 (2003)

「緬懷翁阿來先生」楊燕民『回國五十年（建國初期回國旅日華僑留學生文集）』台海出版社、p37-41

施旅旋 (1950)

「神戶華僑第四屆集團結婚參觀記」『華僑文化』（華僑文化經濟協會）第 20 号